

秦野に伝わる古代の人々

弘法大師とは？

秦野にある「弘法山」「弘法の清水」などの地名にある「弘法」は、平安時代初期の僧である空海くわかいを指します。空海は奈良時代末の宝亀5年（774）に讃岐国（香川県）で生まれ、遣唐使として唐（今の中国）へ留学し密教を学び、日本へ帰国後は紀伊国（和歌山県）にある高野山で金剛峰寺を総本山とする真言宗の開祖となりました。同じ頃に活動した天台宗開祖の最澄とともに日本の仏教界へ大きな影響を与え、教えは以後も長く継がれています。書道に優れ「弘法も筆の誤り」ということわざで知る人も多いでしょう。承和2年（835）まで生き、後に贈られた諡号しごうにより「弘法大師」と呼ばれています。

問：空海（弘法大師）は、本当に秦野に来たの？

答：弘法大伝説は日本全国にあり、九州から北海道まで三千以上の数があるといわれています。空海が一生のうちにその全ての土地を訪れたとは考えられず、多くは空海が実際に行った事柄ではないでしょう。秦野では近隣でも空海が来訪した可能性を示す史料や伝説が確認できず真相は不明です。

問：なぜ全国でたくさんの弘法大師伝説があるの？

答：平安時代には、空海の教えを広めるために高野山から日本全国を巡り歩いた「高野聖こうやひじり」と呼ばれる人々がいました。その人々が行った事績や語り弘法大師の伝説として残ったと考えられます。また、神の子を指す「大子だいし」の伝説が、字から大師の伝説となったという説もあります。

秦氏とは？

『古事記』や『日本書紀』等の古代史料によると、応神天皇の時代に日本列島にやってきた渡来氏族で、秦始皇帝の後裔を名乗り、養蚕や機織りの技術を以って朝廷に仕えたとされています。

秦氏は、氏族の規模が大きく、古代史料に「秦」の字を持つ人物が多く見られる一方で、他の渡来氏族に比べ、中央政府の第一線で活躍した人物が少なく、中央政府と一定の距離を置きながら巨大氏族を組織していたという特徴があります。

その氏族規模や技術力を背景に、長岡京・平安京遷都に大きく関与したとも言われており、分布地域や、儀礼祭祀など、様々な視点から研究がなされていますが、未だその全容が解明されず、謎多き一族であると言えます。

問：秦氏はどこから来たの？

答：『日本書紀』の記述によると、朝鮮半島の百済から渡来したとありますが、明確な記述がある史料が少ないため、朝鮮半島の古い地名や、新羅仏教との結びつき等から、新羅から渡来したという説が有力視されています。また、さらに西方へそのルーツを求める説などもあり、真相は不明です。

問：秦氏の「秦」は秦野の「秦」なの？

答：秦野は秦氏の末裔が開発し、「秦」の字は秦氏に由来していると考えられた時期もありましたが、文献資料はもちろん、考古資料からも秦野と秦氏が結びつく証拠は見つかっていません。奈良時代から平安時代にかけて、秦氏の人物が相模国の役人に任命されていることや、江戸時代に秦氏伝説が定着したことが要因と考えられます。